

南極上空の微生物調査

弘大・小林教授が第60次観測隊員に

来月下旬 研究への応用期待 出発へ

弘前大学理工学研究科の小林史尚教授(50)が第60次日本南極地域観測隊夏隊員として今年11月下旬、南極へ向かう。現地では南極上空の大气中に浮遊する微生物粒子について調査する予定で、出発に向けて実験機材などの準備を進めている。小林教授は「今後の研究に貢献できるように目的を達成し、元気に帰って来たい」と意気込みを語った。

(成田真由美)

小林教授は2012年、第54次南極地域観測隊夏隊同行者として、昭和基地で係留気球を使い高度10000

回目で、隊員としては初参加となる。

今回の目的は①南極

着メカニズムを明らかにする②他大陸からの

微生物長距離輸送③極

域の大气バイオエアロ

ゾル(大气中の微生物粒子)観測の3点。

このうち、昭和基地

から約20キロ離れた南極大陸氷原のS17観測拠

点での調査では、約2

カ月間滞在し、南極上空の大气バイオエアロ

ゾル調査を行う。観測は無人機を高度2000

0メートルまで飛ばし、地表の影響が及びにくい自由対流圏の微生物を採取するという。

これは大陸間を長距離輸送するような微生物の存在から、生態系への影響を明らかにす

ると期待される。小林教授は南極上空の大气バイオエアロゾルの調査の可能性について、「生物進化化学や系統地理学、医学、植物学、気象学など多くの分野に関わりがあり、インパクトを及ぼす可能性がある」と指摘する。さらに、「南極という過酷な寒冷地の環境で観測が成功すれば、その技術は弘前で南極観測船「しらせ」に乗って南極へ向かう。



南極地域観測隊員として11月下旬に現地へ向かう小林教授。制服を着用して研究への意欲を語った

※この画像は当該ページに限って陸奥新報社が利用を許諾したものです。
[問合せ先]弘前大学理工学研究科
E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp

小林教授は南極上空の調査の可能性について、「生物進化化学や系統地理学、医学、植物学、気象学など多くの分野に関わりがあり、インパクトを及ぼす可能性がある」と指摘する。さらに、「南極という過酷な寒冷地の環境で観測が成功すれば、その技術は弘前で南極観測船「しらせ」に乗って南極へ向かう。

小林教授は必要な訓練などを終え、実験機材などの調整に入っている。11月下旬に空路で出発し、オーストラリアへ向かう予定で、南極観測船「しらせ」に乗って南極へ向かう。